

【親鸞部門（中学生）・文化時報社賞】

「闇」と共存する「世界」

私立東京農業大学第一高等学校中等部 第2学年 笹崎 塔子

私にとっての「世界」とは、必ず「闇」があるということだ。どんなにすごい人やどんなに笑顔をふりまいている人でも必ず悩みや悲しみとった「闇」があるのだと考える。

私が一番、「闇」を感じたのは、学校の間人間関係からなる「いじめ」というものだ。私はいじめられたこともいじめられていることを黙視してしまったこともある。そこで初めて、「闇」を感じてしまった。学校一の優等生も表向きは良い顔をしている人も誰かをあざ笑う様子を見てしまった。もちろんそうではない人もいる。でも、そこで「無言の怖さ」を知った。

他にも最近、思うことがある。それはコロナウイルス関連によって飛び出るコメントだ。ニュースを見ているとコメンテーターの人たちはほとんどがネガティブなコメントをしていた。もちろん批判すべきことやネガティブにとらえなければならぬこともある。しかし、全てが全てそのような捉え方をしなくてもよいと思う。

また、近年「差別」に関するニュースを見るが、そこで「このようなことをなくさなければならぬ」と出演者はうったえる。だがそこに人をあざ笑ったことがない人はいるのだろうか。これも一種の「闇」なのだと改めて感じた。

でも、人には必ず「闇」がどんな形であろうとあるのだと思う。心の中であつても誰でも「闇」をかかえていると思う。私が言いたいのは「闇」があるのが悪いということではなく、その「闇」をどれだけ表に出し、良い方向に向かえるかが大切だと思う。

このように、人には悩みや悲しみ、あざ笑う心の中であつてもある。しかし、これを表に出す人は少ない。なので、私にとっての「世界」とは「闇」が必ずある。そしてこれから、それをできるだけ表に出し、良い方向に向かうことができるような「世界」になってほしいと思う。